

芥川龍之介『邪宗門』覚え書

菊 地 弘

『邪宗門』は大正七年十月から十二月まで三十二回にわたって「大阪毎日新聞」と「東京日日新聞」に断続的に掲載された作品であるが、完結をみずにいたっている。ところが芥川は大正十一年十一月十三日春陽堂からこの作品を単独で単行本『邪宗門』として刊行した。末尾で

「邪宗門」の後記

「邪宗門」は少時の未定稿である。今更本の形にすべきものではない。それを今上梓するのは一には書肆の囑により、二には作者の貧によるのである。

なほ又未定稿のまま上梓するのは作者の疎懶の為ばかりではない。作者の心も谷水のやうに逆流することを得ないからである。

大正十一年十月

芥川龍之介記

と記した。気持は戻つてゆくことはないと言うが、未完の作品

を上梓するということには、その作品を執筆した時の熱い思いへの執着があつたと想像される。それでは芥川の感慨とは何であつたろうか、探ってみることにする。

多くの評者によつてこの作品は『地獄変』の続篇とみられている。それは作の冒頭で

先頃大殿様御一代中で、一番人目を駭かせた、地獄変の屏風の由来を申し上げましたから、今度は若殿様の御生涯で、たつた一度の不思議な出来事を御話致さうかと存じて居ります。(一)

とあることである。その他にも、良秀の娘が乗つたような火の燃えしきる車が天から下りて来て、その中から「大殿様をこれへ御迎へ申せ。」という声が出たという夢をある女房が見た(二)とか、へあの良秀が五趣生死の図を描いた龍蓋寺(二)と

か、大殿の車の牛がそれて往來の老人に怪我をさせた時、老人がかえつて手をあわせて、権者のような大殿の牛にかけられた冥加を有難がった(四)とか、いずれも『地獄変』で書かれていたことをうけついでいる。従つて『地獄変』の繼承と捉えることに理由はあはる。

ところで大正七年十月二十一日小島政二郎宛の書簡にみられるように、久米正雄の『牡丹縁』が急に完つたので、芥川がそのあと三十回から四十回の長さの作品を大阪毎日新聞から要請された。芥川はうまく出来るかどうか覚束ない状態を明かしている。しかし三日後の二十四日の薄田淳介宛書簡では、

やつと間に合はせましたからこれからは毎日中絶せずに書いて行きます尤も右様の次第で少々急ぐ必要があるから出来栄は始から餘り自信がありません今日五回へはいつてやつと本文へとりかかつたがどうも足並が甚怪しいのです。

と、やはり覚束ないありさまを吐露しているが、五回で軌道にのりだしたことを明示してゐる。五回は若殿の代になり堀川邸はすべて新しくなつたことが語られる。

そこで順序として大殿と若殿の人間の相違から見えてゆくことにしよう。芥川は、『地獄変』で堀川の大殿と芸術家良秀とを對比させて語つていたのと同様な方法で、大殿と若殿を對比させ、性質風貌の違いを示す。

大殿様は御承知の通り、大兵肥満でいらつしやいますが、若殿様は中背の、どちらかと申せば瘦ぎすな御生れ立ちで、

御容貌も大殿様のどこまでも男らしい、神將のやうな倅とは、似もつかない御優しさでございます。(二)

とある。瘦ぎすな若殿は大殿と異つて、どこか繊細な感情の持ち主であつて、それは優しい人柄と容易に結びつくことになつてゐる。さらにそのような性質の若殿は、大殿がへ武張つた事を御好みになるのに対し

若殿様は又詩歌管絃を何よりも御喜びなさいまして、その道々の名人上手とは、御身分の上下も御忘れになつたやうな、隔てない御つき合ひがございました。(二)

とあつて、美的享樂者に若殿を造型している。が同時にへ御家の集にも、若殿様の秀句や名歌が、今に沢山残つて居ります(二)とも語られてゐるところを考えれば、創造者でもある。

中でも世上に評判が高かつたのは、あの良秀が五趣生死の図を描いた龍蓋寺の仏事の節、二人の唐人の問答を御聞きになつて、御詠みになつた歌でございます。これはその時聲の模様、八葉の蓮華を挟んで二羽の孔雀が鑄つけてあつたのを、その唐人たちが眺めながら、「捨身惜花思」と云ふ一人の声の下から、もう一人が「打不立有鳥」と答へました——その意味合ひが解せないのです、そこに居合はせた人々が、兎角の詮議立てをして居りますと、それを御聞きになつた若殿様が、御持ちになつた扇の裏へさら／＼と美しく書き流して、その人々のある中へ御遣しになつた歌でございます。

身をすてゝ花を惜しと思ふらむ打てども立たぬ鳥もあり

けり(二)

良秀の画にちなむ寺の仏事の節ということを踏まえて、若殿の示した和歌を考えると、良秀の死を賭した芸術の不滅の価値を、若殿は解説したと読める。〈花〉を芸術におきかえ、〈鳥〉を良秀とみなしてよめば、若殿は良秀の芸術の理解者として浮かびあがつてこよう。

その若殿は笙を愛好し、中御門の少納言の弟子となっていた。若殿は〈伽陵の笙〉と、〈大食調入食調〉の譜の伝授を少納言に請うが、満足な返事がもらえないことを、大殿と双六を打っているときに洩らす。それから半月もたたぬうちに、中御門の少納言は〈俄に血を吐いて御歿りにな〉り、その翌日若殿の居間の机に〈伽陵の笙〉と〈大食調入食調の譜〉とが載っていた。その後双六を打ったおり、大殿が〈この頃は笙も一段と上達致したであらうな。〉とたずねたのに対し、

「いや笙はもう一生、吹かない事に致しました。」と、吐き出すやうに御答へになりました。

「何として又、吹かぬ事に致したな。」

「聊かながら、少納言の菩提を弔はうと存じまして。」

かう仰有つて若殿様は、鋭く父上の御顔を御見つめになりました。(三)

と、敵として権力者大殿に抗する美の探求者若殿が存在しているのを描いている。

大殿の車の牛にかけられた老人が〈冥加の程を、難有がつた〉

ときも、若殿は

「前略怪我をしてさへ、手を合せて、随喜する程の老翁ぢや。轍の下に往生を遂げたら、聖衆の来迎を受けたにも増して難有く心得たに相違ない。されば父上の御名譽も、一段と挙がらうものを。……」(四)

と権者への痛烈な皮肉を投じている。『地獄変』の良秀は、権力者堀川の大殿に芸術道で酬いたが、ここでは若殿は皮肉(才知)で責めている。

そのような大殿と若殿との間柄から、〈大殿様の御臨終を、ちつと御目守りになつていらつしやる若殿様の御姿程、私どもの心の上に不思議な影を宿したものはございません。今でもその時の事を考へますと、まるで磨ぎすました焼刀の匂ひを嗅ぐやうな、身にしみてひやりとする、と同時に又何となく頼もしい、妙な心もちが致した〉と語り、〈誠にその時の私どもには、心から御代替りがしたと云ふ気が、——それも御屋形の中ばかりではなく、一天下にさす日影が、急に南から北へふり変つたやうな、慌しい気が致したのでございます。〉としてゐる。代替りは邸内だけではなく世の中(現実)も動いてゐるとしてゐるのである。権力から知力へ、芸術の道へ新時代を迎えることをそれは意味してこよう。その代替りによる新しい動きを、大正七年の時間に置き換えられるとすれば、民衆芸術の問題が起り、武者小路の新しい村がはじまり、私小説、心境小説が盛んになる文壇の動向のなかで、芥川や菊池寛らが独自の作風を樹立しはじめた

時期でもある。そして押えておきたいことは、この作の若殿は織細で優雅な趣を好む気性で、〈詩歌管絃を何よりも〉(二)愛好する、美意識の所有者ということである。

今日五回へはいつてやつと本文へとりかかった、従つて作者芥川の主旨は第五章以降に盛られていると、みていじらうと思う。第五章は若殿の代になりすべてが變つたと語りはじめて

殊に以前と變つたのは御屋形へ御客に御出でになる上つ方の御顔ぶれで、今は如何に時めいてゐる大臣大将でも、一芸一能にすぐれていらつしやらない方は、減多に若殿様の御眼にはかゝれません。(五)

と、美の享受者若殿の選良意識を語る。一方、詩歌管絃の道に長じてさへ居りますれば、無位無冠の侍でも、身に餘るやうな御褒美を受けた事がございます。

とも語つて、若殿の階級を超えた芸術優位の姿勢をも強調している。つまり芸術的エリート意識を内にもち、他者にも要請する若殿である。そのへ若殿様の御一生に、たつた一度しかなかつたと云ふ、不思議な出来事の御話とは何か、作中に探ることとは不可能であるが、いわれているように、若殿と麻利信乃法師との対決であろうが、そこへ差し掛るところで作は途絶している。そこでそこまで行くプロセスを作から覗いてみる。

若殿はへ中御門の少納言様の御一人娘で、評判の美しい御姫

様へ、茂々御文を書き、へ恋慕三昧に耽つて御出でになつたという。〈恋慕三昧〉とは意外な感を覚える。それは、〈詩歌管絃〉に興ずる美的感受者の内なる心を解明する場が描かれてこなかつたことによる。美的感性と恋する感性とがどのように結節されるのか、それぞれのあり方が不明瞭である。以後の作の展開のなかで、美意識に生きる若殿とみるか、恋慕三昧に耽る若殿に力点を置いてみるのか、曖昧さが指摘できるのである。

ところでその姫君に恋を寄せたものは若殿に限らない。殿上人で姫に思いをかけなかつたものはおそらく一人もない。なかでも若殿と詩文の交わりも深かつた菅原雅平は、恋がかなわかつた恨みからへ俄に世を御捨てになつて、唯今では筑紫の果に流浪して御出でになるとやら、或は又東海の波を踏んで唐土に御渡りになつたとやら、皆目御行方が知れない(六)という。他にも恋にまつわる悲喜劇のドラマが語られる。そして慕われる姫については、

この御姫様は御気象も並々ならず御潤達でいらつしやいましたから、なまじひな殿上人などは、思召しにかなふ所か、すぐに本性を御見透しになつて、とんと御寵愛の猫も同様、さんざん御弄りになつた上、二度と再び御膝元へもよせつけない……(六)

というような勁さをもっているということである。さらに自由な生活をしたことはなく、美しく、潤達であることにまかせて世を世とも思わない大胆なことをする姫君であるとも語つて

いる。ということ、自由奔放で自在な行動をとる個性的な姫君をイメージさせられる。しかも姫は「実は少納言の北の方と大殿様との間に御生まれました」という噂もある。若殿は、そのような姫から返事はないが三日にあげず文や歌を、また絵巻を届ける。「皆恋がさせた業ぢや。」という一方通行が語られる。噂が事実だとしたら、若殿と姫は腹違いの兄妹となり、近代の倫理からすれば、通念の枠から出た異常といえる恋の〈業〉であるといえる。

恋の遺恨から大殿が少納言を毒殺した話が伝わるなかで、堀川の屋形ものを仇のように憎む平太夫に若殿はおそわれるが、逆に捕り押え、若殿は姫君宛の文を平太夫が届けることで、平太夫を赦免する。その後若殿は夜毎に西洞院の屋形へ通うようになる。恋慕は遂げることが可能になったといえる。

涼しい夜気の中に、一人二人の女房を御侍らせになつて、もの静に御酒盛をなすつていらつしやる御二方の美しさは、まるで倭絵の中からも、抜け出していらしたやうでございました。殊に白い単衣襲に薄色の桂を召した御姫様の清らかさは、をさをさあの赫夜姫にも御劣りになりは致しますまい。(十八)

と語られているように、姫の美しさを示す表現が物語の形容で類型的であることに注意したい。また、世間一切を「生滅遷流」するものとみる若殿の態度に対し、

「まあ、憎らしい事ばかり仰有います。ではもう始めから私

を、御捨てになる御心算でございますか。」と、優しく若殿様を御睨みなさいました。(十八)

といい、若殿が、いや始めから捨てられる心算で居ると申した方が一層予の心もちにはふさわしいというのに答えて、

「たと御弄り遊ばしませ。」

という姫である。潤達自在な姫君とは思えない感情表現の薄さが指摘できるのである。その動きの見えないことは若殿にも見える。

「されば果なくないとも申されまいな。が、われら人間が萬法の無常も忘れはて、蓮華蔵世界の妙薬を暫したりとも味はふのは、唯、恋をしてゐる間だけぢや。いや、その間だけは恋の無常さへ忘れてゐると申してもよい。ぢやによつて予が眼からは、恋慕三昧に日を送つた業平こそ、天晴知識ぢや。われらも穢土の衆苦を去つて、常寂光の中に住さうには伊勢物語をそのまゝの恋をするより外はあるまい。何と御身もさうは思はれぬか。」と横合ひから御姫様の御顔を御覗きになりました。(十八)

としている。現実的感覚は薄く、物語に倣う、非個性的、類型的な恋といえはいるのであつて、恋による結果は期待できない。享樂的な耽美の世界である。若殿の〈恋慕三昧〉は一切無常とみる関係のなかで生じている。すなわち

「……弥陀も女人も、予の前には、皆われらの悲しさを忘れさせる傀儡の類ひに外ならぬ。」(十九)

と明すように、恋は刹那の慰みで、真に掌中におさめうるものではないとしている。既にあつたように、伊勢物語をそのままの恋をする風雅な心のさまを美とする若殿であつたのである。このように、耽美こそ絶対とする、美の享受者が描かれる。『地獄変』の良秀の理解者である一方、恋の瞬時に我の解放と、醒めたニヒリズムとの矛盾衝突をかかえた若殿である。

その頃京都に一人の異形の沙門が現れ、〈摩利の教〉を弘めはじめていた。〈見慣ぬ女菩薩の画像を掲げた旗竿を片手につき立て、頸にかけた十文字の怪しげな、黄金の護符(九)をかざした摩利信乃の登場を語る。クリスト教の布教であることは読めば明らかである。その摩利信乃の法力がこの国の風土に浸透し、おいおい信者の数が増えてゆく様子が示されている。そして、摩利信乃法師と申します男も、この国の生れやら、乃至は唐土に人となつたものやら、とんと確かなことはわからないと云ふ事でございます。〉(十)とある。この摩利信乃法師を、先にあげた、姫君との恋がかなわなかつた恨みから行方の知れなくなつた菅原雅平(六)と重ねることは、いわれているように可能である。また、

「あなた様がこの摩利の教を御扱めになつてゐらつしやうなどとはこの広い洛中で誰一人存じて居るものがございますまい。(中略)何時ぞやの春の月夜に桜人の曲を御謡になつた、あの御年若なあなた様と、唯今かうして炎天に裸で御歩

きになつてゐらつしやる、慮外ながら天狗のやうな、見るのも凄じいあなた様と、同じ方であらつしやうとは、あの打伏の巫子に聞いて見ても、わからないのに相違ございませぬ。」(二十一)

と平太夫が語るなどからも、その同一性はほのめかされてゐる。

菅原雅平は若殿と詩文の交わりも深く、〈風流第一の才子〉で、姫君に寄せる心は若殿と同じであつた。

「昔、あの菅原雅平と親う交つてゐた頃にも、度々このやうな議論を闘はせた。御身も知つて居られようが、雅平は予と違つて、一凶に信を起し易い、云はゞ朴直な生れがらぢや。されば予が世尊金口の御経も、実は恋歌と同様ぢやと嘲笑ふ度に腹を立てて、煩惱外道とは予が事ぢやと、再々悪しざまに罵り居つた。その声さへまだ耳にあるが、当の雅平は行方も知れぬ。」(十九)(傍点菊地)

と、若殿による雅平観が明示されている。この若殿の観方は、〈弥陀も女人も、予の前には、皆われらの悲しさを忘れさせる傀儡の類ひに外ならぬ。〉という文脈につづく評である。無常観をもつ若殿は、お経も恋も瞬時の慰めの域を出ないとしている。その〈予〉との比較で、飾らない氣質の雅平は信仰におもむく氣質であることを強調している。

「さう申せば姫君も幼馴染のあなた様が御無事でいらつしやると御聞きになつたら、どんなにか御喜びになる事でございますま

せう。〕(二十二)という平太夫の言葉を受けて摩利信乃は、へさてその姫君に就いてちやが、予は聊か密々に御意得たい仔細がある。それは姫君を恋しく思つてのことではない、へあの玉のやうな姫君も、この天地を造らせ給ふた天上皇帝を知られぬ事ぢや。されば神と云ひ仏と云ふ天魔外道の類を信仰せられて、その形になぞらへた木石にも香花を供へられる。かくてはやがて命終の期に臨んで、永劫消えぬ地獄の火に焼かれ給ふに相違ない。(二十二)といい、また姫君の身のまわりにへ水子程の怪しげなもの^註がうごめいてゐる夢を見たという。

「予はその怪しげなものを妖魔ぢやと思ふ。されば天上皇帝は、墮獄の業を負はせられた姫君を憐れと見そなはして、予に教化を施せと靈夢を賜つたのに相違ない。…(二十三)と述べてゐる。それは「信仰的な愛をもつて姫君との關係を復活せんとする者」と捉えることはできよう。しかし「御意得たい仔細」は、麻利の教を姫君に知らせることが直接の意味であらう。勿論、恋を風流事とすることは異なる。

帰朝者麻利信乃法師に「西洋の呼び声」を感じる。それを証する具体的な形象を作から覗くことはできない。しかし、潤達自在な姫君に、西洋の底に根を張つてゐるキリスト教の愛を教えることになるのではないか、いやキリスト教の教え(精神)とまでいわなくとも、西洋の知を「一図」に吹きこむことになつてゐないか。

麻利信乃の肩にかかつてゐる「美しい薄色の桂」は、世間に

は類が多いとはいへ、

もしやあれは中御門の姫君の御召し物ではございますまいか。万一さうだと致しましたら、姫君はもう何時の間にか、あの沙門と御対面になつたのでございませうし、或はその上に麻利の教へも、御帰依なすつてしまはないとは限りません。(二十八)

と伝へてゐる。それは、この作品の他の箇所でもそうであるように、推測の語り口で叙述されるが、意外に重要である。姫君と麻利信乃法師との深い間柄を示し、もはや若君のはいりこむ余地のないことを暗示してゐよう。

題名が『邪宗門』であるからには、法力のたたかいが主題とならう。邪宗の麻利の教えで伝統に対する反逆を描くことであらう。そうなると思つて指摘があるように、関連的に『神神の微笑』を想起させられる。

天が下に功德無量の名を轟かせた、横川の僧都(三十一)を破つて「仏菩薩は妖魔の類、釈教は墮獄の業因」(三十二)という麻利信乃法師に應えて若殿が対決すべく登場したところで、作品は中絶となつてしまつた。

先にも触れたように若殿の美的感性と「恋慕三昧」の内なるすがたが充分に描かれていないが、それは「弥陀」も「女子」も悲しさを忘れさせる「傀儡」にすぎないという若殿の存在性を稀薄にしている。利那的な喜びをいい、「弥陀」も「女人」も真の救済とはならないことが、表現から読めるが、そのような

心境に至つた若殿の内的葛藤は十全に描かれていない。そこにこの作の一つの問題がある。また、作の進行役の「私」が、作のなかばより甥とともに麻利信乃をつけ狙ひ、殺そうと動くことは作の客観性を薄め、文学的リアリティを失うことにもなる。これは構想の問題であろう。

この頃の芥川は『踏絵』を構想し、「開化もの」といわれる作品を発表している。民衆芸術が叫ばれる新思潮のなかで、西と東を相対的に思考する芥川であった。原構想としてあつたかどうか、明らかにしえないが、伝統的な美意識に「西洋の呼び声」をつきつけたのではないが、東から西へ赴き、再び東へ戻つてきた、つまり西の呼び声の使者として麻利信乃を考へてみてはどうか、耽美者若殿と麻利信乃の対決が予想されるが、姫君が介在者として二人の中に動くことがあれば、状況はどのように変わるであろうか。しかし作者が書いていない以上、想像の域を出ない。

作者が単行本上梓に際して、執筆時の気持へは「逆流することを得ない」と書いた大正十一年は、芥川が新たに現実に向き合つた年である。つまり『神神の微笑』『六の宮の姫君』など発表した芥川は、文明を視野に入れ、「近代」の精神と己れとに向き合う。すなわち、日本の近代を検証しようということが底流にあつた。そうした中で、「西洋の呼び声」をどのように定位したらよいか、いまだ構想の定まらなつたことが、この作を未完にとどめたかと思える。一方この時分虚無的な人間観を打ち

出していた。このような心情から、『邪宗門』執筆時の気持に立ち返ることはないとしているのである。

未完ではあるが、作者は、おそらくわが国の文明史も視野にいたれた構想による『邪宗門』を、発表当時の作者の、「開化もの」「ギリシタンもの」への熱い思いと脈動するものとして上梓したのである。(この稿未完)

註1 岩波版『芥川龍之介全集第二巻』(一九七七・九・一九)の解題によると、「大正七年(一九一八)十月二十三日から十二月十三日まで、三十二回にわたつて『大阪毎日新聞』(夕刊)に連載され(十月二十五日、十一月三十一日、十一月十七日、二十一日、二十六日、十二月二日、八日、十日休載)、『東京日日新聞』にも同年十月二十四日から十二月十八日まで同じく掲載された(十一月一日、四日、十二日、十六日、十八日、二十二日、二十四日、十二月二十五日、七月九日休載)。のち『邪宗門』報恩記」に収められた。

註2 筑摩版『芥川龍之介全集7』の脚註による。
註3 海老井英次氏は、『邪宗門』論(海老井英次 宮坂覚編『作品論芥川龍之介』一九九〇・一二・一二、双文社)で次のように述べている。

天上皇帝は、墮獄の業を負はせられた姫君を憐れと見そなはして、予に教化を施せと靈夢を賜つた。(二二二)

という信念の下に、麻利信乃法師は姫君に接近するのだが、かつて失恋という形で終わった現世的な「恋愛」に代わつて、信仰的な愛をもって姫君との関係を復活せんとする者であるとしてよみてあろう。しかも、姫君を、「墮獄の業を負はせられた」者とみなしている点からすれば、巻間の噂という形で伝えられている、若殿と中御門少納言の姫君とが異母兄妹である事を「事実」として捉えていると思われるのであり、単に若殿の「風流」的な愛の犠牲者として姫君を見て救出しようとしているのではないであろう。」としている。